

# 旧三加茂町の方言

方言班 (徳島県方言学会)

仙波 光明\*<sup>1</sup> 村田 真実\*<sup>2</sup> 峪口有香子\*<sup>3</sup>

**要旨：**高齢者層のアクセントが讃岐式池田型であり、新しい変化としての低起無核型有核化現象は見られなかった。聞き取り調査で得られた談話資料からは、「ダロー」が「ヤロ」になっている例などを確認できた。また、文字資料である『手書き三加茂百話』では、標準語的な言い方がいろいろと見つかるが、主として形容詞ウ音便、ワ行五段活用動詞のウ音便の出現状況、アスペクト表現の語形、理由を表す接続助詞の使用状況等から標準語化の様相が分かる。

**キーワード：**低起無核型有核化現象、ウ音便、～よる・とる、けん・きん・から

## 1. アクセント

### 1. 1. 概要

本稿では、徳島市を中心に県東部に広がる京阪式アクセント（『補忘記』の時代の面影を残す。現代京都・大阪とは異なる音調が聞かれる）を徳島型と呼び、三好市池田町を中心に県西部に広がる讃岐式アクセント（香川県に存在する讃岐式アクセント観音寺型と似通った体系を持つ）を池田型と呼ぶ。類の別とその所属語については『早稲田語類』に従った。なお、表記上の煩雑さを避けるために、それぞれのアクセントを示す際に記号を用いた。Hを高拍、Lを低拍として記述した。特別に助詞をあらわした場合はハイフンで繋いだ（「竹が」ならHH-Hと表記する）。

吉野川上流域には池田型が、下流域には徳島型が、中流域には池田型と徳島型両方の性格を持つ境界地帯が存在する。本調査の対象は吉野川上流域の三加茂町であり、村田（2010）によると池田型の体系・音調型を有する地域である。

### 1. 2. データについて

今回使用するデータは、2012年夏に方言班が行った調査の結果であり、三加茂町生え抜きの方6名（80代2名、70代4名）にご協力を頂いて得たものである。調査は読み上げ式の面接調査であった。調査語については後述する。

### 1. 3. 讃岐式アクセント池田型とは

池田型の特徴について、徳島型と比較しながら述べる。池田型とは三好市池田町を中心に分布する讃岐式アクセントの下位体系の一種である。類の統合と音調型は以下の表1のようにになっている。

このように、2拍名詞の類の統合状況（第3類が第1類と同じHH・HH-Hで実現されると池田型、第2類と同じHL・HL-Lで実現されると徳島型）と、2拍動詞第1類の音調の違い（HLで実現されると池田型、HHで実現されると徳島型）によって、徳島型と池田型は区別される。この点について特に注目し、結果を見ていく。

### 1. 4. 2拍名詞のアクセント

調査語は以下の通りである。名詞については、そ

\* 1 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

\* 2 徳島大学大学院地域科学教育部博士後期課程

\* 3 徳島大学大学院地域科学教育部博士前期課程

表1 類の統合状況と音調

	池田型		徳島型	
1 拍名詞	省略			
2 拍名詞	1・3	HH・HH-H	1	HH・HH-H
	2	HL・HL-L	2・3	HL・HL-L
	4	LH・LL-H (LH-H)	4	LH・LL-H
	5	LH・LH-L	5	LH・LH-L
3 拍名詞	省略			
2 拍動詞	1	HL	1	HH
	2	LH	2	LH

それぞれの語に名詞単独，名詞＋助詞＋動詞，「この」＋名詞＋助詞＋動詞の項を設け，厳密に調査をした。調査語彙は類別語彙表から偏りのないよう選定した。

表2 2拍名詞調査語

類	語彙	語数
1	竹，箱，水，鼻，端，鳥	6
2	歌，音，雪，冬，夏，人，北，梨，蟬	9
3	花，足，犬，耳，山	5
4	跡，糸，松，海，息，数，針，屑，箸，空	10
5	窓，猿，鶴，亀，朝，蜘蛛，声，鍋，井戸，秋	10

これらの語の調査を行い，得られた結果をまとめたものが以下の表3である。

表3 2拍名詞の結果

		2拍名詞
類の統合数(統合状況)		4 (1・3 / 2 / 4 / 5)
音調	第1類	HH・HH-H
	第2類	HL・HL-L
	第3類	HH・HH-H
	第4類	LH・LL-H(LL-L)
	第5類	LH・LH-L

第3類が第1類に統合しており，三加茂町は池田型の体系を持っていることが分かる。

1. 5. 低起無核型の語の有核化現象

低起無核型の語が有核化する現象(LH・LL-H> LH・LH-L「松が」が「マツガ」ではなく「マツガ」のように発音される)については，岸江・村田

(2012)に詳しいが，本稿では三加茂町でこの現象が起こっていないかについても確認する。岸江・村田(2012)では，若い世代を中心に池田型の地域でもこの現象が起こっているとしているが，本調査では認められなかった。これは低起無核型有核化現象が比較的最近起こり始めたことと，今回の調査対象が70代以上の高年層であったことに起因すると考えられる。

1. 6. 2拍動詞のアクセント

2拍名詞と同様に，2拍動詞についても調査をした。調査語は以下の通りである。

表4 2拍動詞

類・活用	語彙	語数
第1類 (5段)	煮る，似る，いる	3
第1類 (1段)	着る，寝る，する	3
第2類 (5段)	打つ，書く，読む，切る，住む	5
第2類 (1段)	来る，出る，見る，得る	4

これらの語の調査を行い，得られた結果をまとめたものが以下の表である。

表5 2拍動詞の結果

	2拍動詞
第1類 (5段)	HL
第1類 (1段)	HL
第2類 (5段)	LH
第2類 (1段)	LH

以上，第1類(5段活用及び1段活用)の音調はHLであり，池田型であると判断できる。

1. 7. アクセントまとめ

三加茂町は讃岐式アクセント池田型の分布地域であることが追認できた。また，70代以上を対象に調査をした為か，池田型にも及んでいるはずの低起無核型有核化現象は認められなかった。

以上，三加茂町のアクセントについて報告を終える。

## 2. 聞き取り調査から

この項では、4人の女性の録音資料から抽出できた、方言として特徴的と思われる項目について述べる。なお、一部の項目については、3「手書き三加茂百話」からの項で詳しく述べる。

### 2. 1. 文法

#### 2. 1. 1. 動詞の音便形

録音資料から方言的現象として抽出できたのは、ワ行五段活用動詞「言う」の連用形ウ音便だけであった。

- ・ヒザガイタイヤ ユータコトナイ  
(膝が痛いなどと言ったことない)

#### 2. 1. 2. 原因・理由を表す接続助詞「けに・けん」

森(1982)は、美馬・三好両郡(上郡)を原因・理由の接続助詞にキニ・キンを使う地域としている。これは、ほぼ半世紀前の昭和30年代の調査に基づくと考えられるが、上郡が「キニ・キン」専用地域であるということではなく、「キニ・キン」も使われる地域であったと解釈するのが妥当であろう。また、1998年に実施された徳島本線沿線グロットグラム調査(図1=仙波・岸江・石田他2007)では、旧三加茂町地域に於いて沿線の他の地域に比べ「キン」の使用が多いという結果が出ており、若い世代からも使用するという回答が得られている。

今回の調査の範囲では「ケン」の使用が最も多かった。また「キニ・ケニ・ケン」に加えて「カラ」も多く確認できた。「カラ」の使用は個人的な傾向が認められた。なお、後述の「三加茂百話」にも「カラ」の使用が数多く認められることを見ると、「カラ」が日常的に使用される場合も多いことが推測できる。

- ・オクッテクレタキニ サンカシテモラワナ  
(送ってくれたから参加して貰わなければ)
- ・ミンナ ワカイキン。(皆若いから。)
- ・コノゴロワ ミナ コーリュウガアルケニ ナー。(この頃は皆交流があるからねえ。)
- ・ワタシヤノトキワー マダ センソーサナカダッタケン。  
(私の時は、まだ戦争最中だったから。)

●使う /使わない ※この地域で使用するが自分は使わない

80代	●		●	●						／	※
70代		●	●	●	●				／	／	
60代	※	※	※	●	●	※	●		／	／	
50代	／	／		●	※	※	※				※
40代	／	※	※	●		※	※	／	／	／	／
30代	／	※		※	※	※	／				※
20代	※	※	●	／	／	※	／			／	／
	三	池	辻	加	江	半	貞	穴	川	山	山
	縄	田		茂	口	田	光	吹	田	川	瀬
	上郡						下郡				

図1 「危ないキニ」と言うかどうか  
(学より東は省略した)

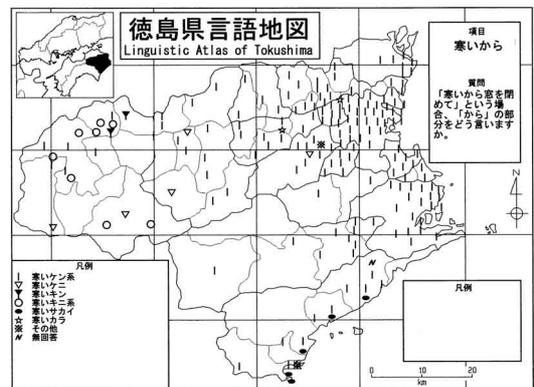


図2 寒いから

- ・ワタシヤガー サンネンセーノトキニ シューセンニナッタカラネー, ホナケン ワタシラワ, シューシノ ホナン チッサカッタケン ウケトランノナ。(私が三年生のときに終戦になったから、だから私たちは修身の、そんなの、小さかったから受けてないのね。)

2. 1. 3. 接続詞「ホナケン・ホナケンド」類  
接続詞のホナケン・ホナケンドはホヤケン・ホダケニ・ホナケド・ホタケド等になるが、ホナキンド

は使わないと言う。

- ・ホナケン ワタシラワ…… (上参照)
- ・ホダケニ オマハンヤユー コトバワ ツカワ  
ナンダナ。(だからオマハンという言葉は使わ  
なかったね。)
- ・ホナケド コノヒトオ ヨブトキニモ アナタ  
ヤイワント オマハントカ ヨンデナー (だけ  
ど、この、人を呼ぶときにもアナタとは言わな  
いでオマハンとか呼んでねえ)
- ・ホタケド オマハンテユーノワ シタシーヒト  
ダッテ  
(だけど、オマハンというのは親しい人であ  
って)

#### 2. 1. 4. 「ダ・ジャ・ヤ」

ここでは、断定の助動詞「ダ」および推量の「ダ  
ロー」等もいっしょに扱うこととする。例えば「雨  
ダ」と言うか「雨ジャ」と言うかは日本語を東西に  
分ける目安の一つであって、西日本方言に属する徳  
島方言では、断定の助動詞として「ジャ」が使われ  
るのが普通であった。

吉野川下流域の下郡では断定の助動詞が文中に現  
れる場合「ヤ」になる傾向が強く(仙波2006)、海  
部地域では、以前から「ヤ」の使用が多いことが指  
摘されている(森1982)。また図3に示されている  
ように、二十世紀末の徳島県方言においては、文末  
においても「雨ヤ」(●印)のようになる地域は、下  
郡の一部と海部地方であることが示されている。

図3には旧三加茂町のデータが示されていない  
が、1998年実施の徳島本線沿線グロットグラム調査  
(仙波他2007)によると、「雨ジャ」という回答しか  
得られていない。

今回の聞き取り調査資料には、まれに「ヤ」も現  
れているものの「ジャ」の例がほとんどであった。  
また、「雨だ」をどう言うかという質問に対して、「雨  
ジャの方がええなあ」という意見と、「雨ヤと言う  
人はいない」という回答が得られている。一方で、  
自然談話の中には、文中に「ヤ」が現れる例として、  
「シギン(詩吟)シヨンヤケドナー」が見つかる。他  
の例はなかった。

推量の助動詞「ダロー」は、ほとんど「ダロ」の  
形で現れ、確認や同意を求める意味での使用が目立

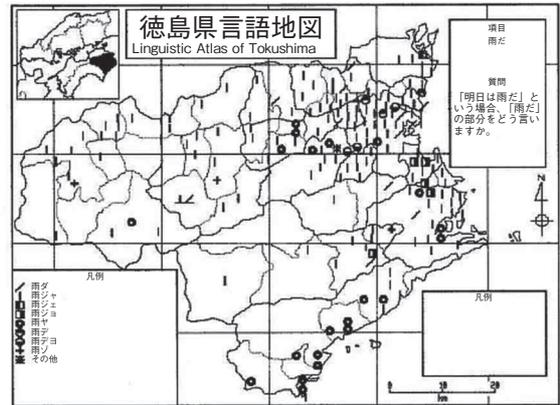


図3 雨だ

つ。「ジャロー」は現れていない。この点、「三加茂  
百話」の場合と異なっている。

- ・キリブサツタラ カカトノ コトダロ。(キリ  
ブサと言えば踵<sup>かかと</sup>の事だろう。同意を求める)
- ・イマノヨーニ ジドーシャデ アッチャコッ  
チャセンダロ。(今のように自動車であっちへ  
行ったりこっちへ行ったりしないでしょ。同意  
を求める)

#### 2. 1. 5. 禁止の表現

「～セラレン」という言い方は、最近になってか  
らの言い方という認識であり、「ほんなどこ行くな」  
「遊びに行たらいかん」「そんな所は行きなはんな」  
のような言い方をする。

#### 2. 1. 6. 命令の表現

命令表現として目立ったのが、「動詞連用形+デ」  
を用いるものである。

- ・オマハンガ ゴジスギニ デデダ。(あなたが  
五時過ぎに出なさいよ。)
- ・カエリナツテユーコトオ インデキデッテ…  
(帰りなつていうことを去んできでって…)
- ・シワシワ カエリデヨ。(ゆっくり帰りなさい  
よ。)

なおこの形式は、田辺聖子の小説にも見られる、  
大阪弁と共通のものである。

- ・早(は)よ、あんたも生みデ(『おんな商売』講  
談社文庫 p. 17)

その他、「イカッサレ(行きなさい)」「コンシャ  
レ(来なさい)」などの言い方は古い言い方であり、  
また「行キナイ」は池田の言い方だという。しかし

当地でも使うようになっているようだ。

## 2. 2. その他

ここでは上郡方言の特徴として指摘されてきた他の事項について順不同で述べる。その多くが明治生まれの人が使っていた言葉という意識を持たれているようであった。

### ① 可能副詞「ミジョ・ミジョー」

「ミジョー行くか（一人でちゃんと行けるか）」のように、自分でする自信があるかどうかを問うときの言葉であり、主に子どもに対して使う。森重幸(1962)によると神山町府能までの分布が見られ、また森重幸(1982)は、美馬・三好郡に特徴的な語であることを示している。仙波他(2002)を見ると、実際に使われている地域は上郡に限られ、しかも衰退していることが見て取れる。この言葉について質問したところ「よう聞く」という反応があった一方で、「聞くのはよう聞いた」「若い人は使わん」ということでもあった。

### ② 挨拶

他家を訪問するときの挨拶「ゴシャメンナシテ(御免下さい)」は『三加茂町史』にも記録されているが、もう使われていない。明治初期生まれの人が使う言葉、今回の教示者(60~80代)にとっても「ウチノバーチャンヤ イーヨッタナ」「ワタシヤノ オバーサン・ヒーバーサングライジャナー」ということである。同様の古い言い方ではあるが、他人を迎えるときの挨拶としては「オイデナハレ・オイデナシテ・オイデマセ」などがあつた。

仕事を終えるとき、その頃の挨拶としては、「シマワンデー(終わりませんか)」「ハヨシモーテ カエリデヨ(早く終わって帰るなさいよ)」などがある。

### ③ 身体語彙

カガマ(膝)、キリブサ(踵)[LLHL]、スポキ(ふくらはぎ)などはお年寄りがまれに使う言葉になってしまった。

### ④ ナ行変格活用動詞の終止連体形「いぬる」

現代語では、「死ぬ・去ぬ」はこの形が終止連体形として使われていて五段活用になっている。仙波他(2002)の『徳島県言語地図』を見る限りでは、まだ「死ぬる・去ぬる」が残っているのだが、今回

の聞き取りでは、以前は帰ることをイヌル(去ぬる)と言っていたが現在では使わなくなっているという答えであった。

### ⑤ 打ち消し過去

加茂山地区など、山分の人はまだ「行カザッタ」という形を使っている。また、森重幸(1982)が里分の言い方に分類している「行カンカッタ」は池田の言葉だという。

## 3. 「手書き三加茂百話」から

### 3. 1. 「手書き三加茂百話」とは

「手書き三加茂百話」(以下、「百話」と記す)は、昭和60年度から3年間にわたり三加茂町民話伝説収集委員会主導のもと、旧三加茂町内の民話・伝説を収集したものである。第二集のあとがきによると、「小中学生が家の祖父母や近所のお年寄りを訪ねて聞き、録音し、そして書いた」ものであり、「方言も語尾をもそのままに書き残そうと試みた」という。

話者は町内の191名(町外在住者4名、地区情報が記されていない4名を含む)であり、男女別・年齢層は下の表6のとおりである。

また、地域毎の話者数は、おおまかに述べるにとどめるが、大藤・大藤東・大藤西14名、木藤4名、毛田・西山4名、江口・山路6名、山口2名、城谷1名、黒長谷7名、西山路2名、中庄2名、中井・西光・安広・高木・市13名、角3名、高田往還1名、中村14名、山根17名、東新町・新町・古川・原30名、西中村・金川・貞広17名、滝下・西町7名、北村11名、稲持5名、鍛冶屋敷1名、浪内1名、泉野1名、土久保4名、加茂山5名、五名3名、桑内1名、西庄2名、平1名、宗本1名、新発地1名、森清1名といった状況である。

話数は3冊の合計で298であるが、長い話もあり、短い話もある。1話ずつをテキストデータにしたファイルの合計データ量が302KBであるので、民話・伝説部分の文字数は15万字近くになると思われる。なお文体はさまざまであり、「～じゃ」「～んよ」のような方言的文末表現が使われている話もあれば、ですます体の話もあり、「である」で終わる書き言葉的文体の話もある。以下、例文の出典は、第

表6 『手書き三加茂百話』の話者

年齢層	男	女
10代	0	1
20代	1	1
30代	2	7
40代	5	19
50代	13	18
60代	35	27
70代	23	22
80代	5	7
90代	1	4
合計	85	106

一集の第15話であれば、(1015 目の悪いおばあさんの話＝大藤西)のように示す。「＝」の後は話者の在在地である。

「ある日のことじゃ。」(1015 目の悪いおばあさんの話＝大藤西)のように「じゃ」で終わる文は218, 「昔はな、バスとかないきん、歩いてそこを通ったんよ。」(2084 大ギセルの話＝古川)のように「んよ」で終わるのが112文ある。一方、「昔、ある村にかわいい娘がおりました。」(1001 蛇巻き石＝中井)のようにですます体の文末を持つ文は「ました」で終わる文だけを数えたところ416文, 「でした」で終わる文の数は61であった。書き言葉的な「である」で終わる文は36, 「であった」は22文見つかった。

このように異なる文体が現れることから、人々が話の相手や場面に応じて、文体や用語を使い分けていることが推測できる。用語においても、標準語形と方言形の両方が見られるが、「三加茂百話」から見る限りにおいては、かなり標準語化が進んでいるように見受けられる。

以下に、項目を分けてその様子を述べる。

### 3. 2. 形容詞連用形の音便形と非音便形

形容詞連用形がウ音便をとり、「赤うなる」「淋しゅうて」のようになるのが西日本方言の特徴とされてきた。「百話」には、もちろんウ音便が多く現れるが、非音便形の「赤く」「淋しく」の類、すなわち標準語形も決して少なくはない。以下に、その一部を示す。

**温かい**(暖かい)：3例のすべてが非音便形であつ

た。

・冬は温かくてそこでせんたくもしていた。(2955 牛くくり＝北村)

**甘い**：ウ音便形が1例だけ使われている。

・南のあま茶はあもうなれ。(2044 あま茶＝大藤)

**痛い**：ウ音便形が1例、非音便形が4例である

・先生はだんだん尻が痛うなってきた。(2046 祖谷の源内さんと加茂の斎藤先生＝松尾)

・急におなか痛くなったりして(1078 八幡神社の立石の話＝新町)

**暗い**：ウ音便形が1例に対して非音便形は9話に13例もある。

・あその家は、二度と暗うなってからは通らん。(1086 空家の話＝大藤東)

・パーとあたりが暗くなり、何も見えんようになつたら、(3038 たぬきの人だまし＝浪内) シク活用形容詞の場合、ウ音便形は「～しゅう」の形をとる。この例は、全体で5例があるだけで、非音便形の「～しく」は28例も存在している。以下にウ音便形だけを引用する。

**おとろしい** 3例

・そんなもん、ちつともおとろしゅうないわ。(2007 だまされた狐＝古川) 他2例は省略。

**さみしい** 1例

・ほんでお姫さんがさみしゅうならんように、(1045 お姫塚の話＝貞広)

**せわしい** 1例

・もっとせわしゅうに入れてくれにゃあ口にたらんでが(3031 逸話＝山根)

非音便形は1例だけ示すにとどめる。

**悲しい**

・おとうさんとおんなのこは、かなしくなつて、旅にでたんじゃと。(1004 ほんことままこ＝平)

なお、方言形として、接続助詞「て」に続く場合は、「～しいて」の形をとることがある。

・お母さんは、うれしいて声が出せなんだ。(1015 目の悪いおばあさんの話＝大藤西)

・それがおそろしいておそろしいてなあ。(2083 あずき洗い＝新町)

### 3. 3. ワ行五段活用動詞の音便

古典語でハ行四段に活用していた動詞類，すなわち現代語のワ行五段活用動詞の連用形が完了の助動詞「た」や接続助詞「て」に続くとき，「言うた・言うて」のようにウ音便の形をとるのも西日本方言の特徴である。このとき「言った・言って」のように促音便になるのが東日本方言の，そして標準語の形式である。この類においても，促音便の形がかなり見られる。

まず「言う」を例に，その状況を見てみよう。ここでは漢字仮名交じり表記されたものだけを対象としている。ウ音便形の「言うた・言うて」が47例であるのに対して，促音便形の「言った・言って」は110例にのぼる。

- ・ほれであの，ごんげんはんって言うての，(1105 石まくりの話＝加茂山)
- ・～と言って中にいれてくれたんじゃ。(3003 しいがしひろい＝角)

次に「思う」の場合はどうだろうか。この語でも促音便形の「思った・思っ」が95例あるのに対してウ音便の方は「思うた・思うて」が14例，かな書き例の1例を加えても15例と，方言形の方は圧倒的に少ない。

- ・たしかくにさんと思うてついていたんぞよ。(3038 たぬきの人だまし＝浪内)
  - ・たぬきじゃと思ったが，まあ引っぱってやりよった。(1120 天神だぬき＝山根)
- なお，「思う」の場合には，「おもた・おもて」のようにモーの長母音が短母音になることがある。
- ・これはおかしいやっちゃとおもて，きのこを見た。(2025 きのこじぞう＝森清)

### 3. 4. 動詞のアスペクト(よる・とる・ている)

3. 4. 1. 動詞に「よる」が続く場合はほぼ継続の意味を表す。なお，多くの方言集には，「進行形」としている。また，まれに次のような形卑表現とみられる例もある。下線を施した文は，「うまいこと化けていた」と言い換えることも，「うまいこと化けやがった」と言い直すこともできると思うが，形卑表現として後者に理解する方が適切であろう。

- ・「ゆんべのきれいな女は狸じゃった。はよ気が

付きゃよかったのに。だまされた。うまいこと化けよったもんじゃのう。」と言って狸に化かされたじいさんは，とてもくやしがりました。(1118 加茂谷の狸＝市)

3. 4. 2. 以下には，「よる」が続く場合の形態(語形)を順次述べる。動詞連用形にそのまま「よる」が続く，また，カ・サ・タ行に活用する動詞の場合には，

#### ①カ行五段活用―「き」から続く

「歩く・行く・炊く」のような五段活用動詞とカ行変格活用動詞「来る」がこれに相当する。

「～きよる」または「～つきよる」の形をとる。

- ・山下くもんが，その中の堂というところを通っていると白い鹿が歩きよったので，(1020 矢おい観音様のお話＝黒長谷)
- ・昼は畑ではたらきよる人にいたずらしたり，夜は歩つきよる人に砂をぶっつけたり，(3046 二本松のたぬき＝中村)

#### ②サ行五段活用・変格活用―「し」から続く

サ行変格活用動詞「する」と「暮らす・さす・探す・化かす・干す」のようなサ行五段活用動詞がこれにあたる。「しよる」の形をとる。五段活用の場合には「～っしよる」の形をとる方が普通である。

- ・足が痛いのもなおしてくれるって，ようお参りしよったんでよ。(2031 西山のお地藏さん＝毛田西山)
- ・ほれで加茂谷の方は，たぬきがよう人を化かしよったんじゃって。(1009 たぬきにばかされた話＝東新町)
- ・ゆうべからみな心配して探っしよんぞ。(1118 加茂谷の狸＝市)

#### ③タ行五段活用―「ち」から続く

「勝つ・待つ」などのタ行五段動詞がこれにあたる。「勝ちよる・待ちよる」という形式が現れてもよさそうだが，この例は見つからなかった。「勝っちょる・待ちちょる」のような語形になる。

- ・たぬきが，ソ連軍の，兵をばかして勝っちょったんじゃと。(3053 戦争へ行ったたぬき＝城谷)
- ・たばこすいながらくにさんが待っちょってくれた。(3038 たぬきの人だまし＝浪内)

④ナ行五段活用一「に」から続く

「いぬ(去ぬ)」だけがこれにあたる。古くは変格活用であり、方言によってはまだ終止形「去ぬる」が残っているようだが、徳島ではほとんど確認できない。五段活用動詞になっているのである。「いんによる」の形をとる。

- ・おまはん先、いんによってよ。(3038 たぬきの人だまし=浪内)

⑤マ行五段活用一「み」から続く

「拝む・進む・涼む・飲む・休む」のようなマ行五段活用動詞とマ行上一段活用の「見る」がこれにあたる。「～みよる」となるほか、「見る」以外は「～んみよる」となる。

- ・家と逆の方向で河岸をずんずん進みよったんじゃって。(1131 狸にばかされた話=西光)
- ・どこへ行くんだろうにとおもうてみよったら(1135 たぬきに化かされた話=稲持)
- ・お茶をいっしょに飲んみよんじゃって(1019 たごさく=山根)

⑥ラ行五段活用一「り」から続く

「いがる・踊る・折る・帰る・座る・作る・釣る・通る・取る・走りまある・走る・降る・やる」というラ行五段活用の例が存在する。「～りよる」「～んりよる」の形をとるほか、「～んじよる」ともなる。また「～いよる」になることもある。

- ・お客にいつての帰りにおりばこをもつて帰りよったら。(2068 三加茂町のむかしの様子=中村東)
- ・その時に中村の道を通って帰んりよったら若い嫁さんがおった。(1120 天神だぬき=山根)
- ・おじゅっさんは、暗い所で一人座んじよるでわ。(1017 ぶつ助=原)
- ・こうしの中でかあらをさして、あがいよった。(1135 たぬきに化かされた話=稲持)

⑦ワ行五段活用一「い」から続く

「言う・思う・しまう・吸う・まう(廻る)・貰う」がこの類である。「～いよる」になるが、「言う」の場合には「イー」の長母音が短母音化して「言よる(いよる)」になることがある。

- ・「こないだ里から木を買いにきた男は一べえと言いよった。(1067 こんまい名前=市)

- ・それを不思議に思いよったら、たぬき火だったんじゃって。(2077 たぬき火=中村)
- ・ほなけどな、前はそこやな「豆だぬきさんがおる、豆だぬきさんがおる。」ってな、いよったん。(1124 たぬき話=中村)

3. 4. 3. 動詞のアスペクト「～とる」

3. 4. 3. 1. 徳島県方言において、「～とる」は完了相に専用されると認識されていた(金沢1961)が、後には進行相にも用いられるという指摘がされるようになった(森1982)。また、東祖谷山村での調査では、数は少ないが「～とる」を進行相にも用いるという回答が得られている(仙波他2007)。「百話」においても、明確に進行相を表していると思われる例は少ないながら指摘することができる。2例だけ次に示す。

- ・楽しい毎日を送とったんじゃけんど(1085 仲の良い夫婦の話=大藤東)
- ・深淵で木を切とる時(2051 大へびの話=桑内)

3. 4. 3. 2. 接続の際の語形は「ている・てる」とほぼ同じで、基本の連用形から続く。例えば、カ行五段活用の「書く」が標準語で「書いている」となるように、「とる」に続く場合も「書いとる」となる。以下、はじめに標準語の「ている・てる」と同じである場合について列挙するが、例文は一部を除いて省略する。なお(\*)を付けた語は、後述する方言としての語形から「とる」に接続することができる。

- ①ア行下一段活用 植える・覚える・生える。
- ②カ行五段活用 促音便から続くもの 行く(\*)。
- ・あずきを買いに行とったんじゃ(3043 たぬき話=城谷)
- イ音便から続くもの 置く・輝く・書く・聞く・(餅を) 搗く・続く・とりつく。
- ・岩の上においとった神様が(3016 男がま女がま=西町)
- ③サ行五段活用およびサ行変格活用 暮らす・だます・見下ろす・する。
- ・山菜ばかりを取つてくらしとったんじゃって(2061 山かせぎの好きなおばあさん=大藤東)

- ④タ行五段活用 促音便「っ」から続くもの  
立つ。  
・その神社のまわりにな、石が立っとるだろ(2024  
八幡さんの立て石=西光)
- ⑤タ行上一段活用 「ち」から続くもの 落ち  
る(\*)。  
・水がてんでんと落ちとる時もあったんで、(2003  
男釜女釜=金川)
- ⑥ナ行五段活用 撥音「ん」から続く。死ぬ。  
・おら首を吊って死んどったかわからん、(1110  
キツネに化かされた話=黒長谷)
- ⑦マ行五段活用 撥音「ん」から続く。  
囲む・住む・飲む。  
・火を囲んどるおとしといっしょに(2048 悪い  
神の話=中井)
- ⑧ラ行五段活用 促音「っ」から続く。  
至る・埋まる・送る・帰る・かかる・可愛が  
る・決まる・着る・困る・こわがる・知る・た  
まる・とまる・とる・なる・ねむる・残る・の  
ぼる・乗る・はいる・またがる・まつる。  
・ほて現在にいたとるわけ(1037 がい森の  
白へび=金川)
- ⑨ラ行下一段活用および助動詞レル 基本の連用  
形「れ」から続く。  
折れる・隠れる・くたびれる・つかれる・流れ  
る・逃れる・離れる・まくれる。  
・上へ上へと草が折れとる方へ、(3039 むかし  
話=山根)
- ⑩ワ行五段活用 促音便「っ」から続く、標準語  
と同じ場合(「言う・失う・思う」の3語、各  
1例)と、西日本方言形のウ音便形「う」から  
続く場合(後述)がある。  
・あそこには背高のっぽが出てくるといとった  
が、(2057 背高のっぽの男=古川)  
・強くたたかかれてな、気を失なっとったらな、  
(2050 大きなへび=西中村)  
・ほったら、小ぞうと思とったんが、大きな石  
で、(3054 たぬきにばかされたすもうとり=  
城谷)
- ⑪ガ行五段活用 イ音便「い」から続く。  
泳ぐ・脱ぐ。

・田んぼの水路に、じゃこがいっぱい泳いどっ  
たんで(2090 たぬきに化かされた話=加茂山)

⑫バ行五段活用 撥音便「ん」から続く。  
遊ぶ・並ぶ・呼ぶ。

・ほの時に大楠に子供がいっぱい、木に登って遊  
んどった。(1060 大楠の成り立ち=中村)

3. 4. 3. 3. 上記のように、「とる」に続く  
場合の語形は、標準語で「ている」に続く場合とほ  
とんど異なることはない。ただし、「行く・言う・  
思う」の3語は、方言語形も保たれている。

カ行五段活用動詞の「行く」は「いとる」になる。  
これは、いったん他のカ行五段動詞と同様にイ音便  
の形を取ったかもしれないが、その場合「イイ」が  
「とる」に続くことになるが、母音連続の「イイ」が  
長母音「イー」になり、さらに短母音「イ」に変化  
して、「いとる」の形を取るに至ったものである。「行  
た」<sup>い</sup>「行て」と同じである。

ワ行五段活用動詞の「言う・思う」は、古典語に  
おいてハ行に活用する動詞であったが、この類は、  
西日本方言において完了の助動詞「た」や接続助詞  
「て」、そして「とる」に続くときには、ウ音便になっ  
ていた。「言うとる・思うとる」となるのが徳島県  
方言の本来の形なのである。なお「買う」は、「百  
話」の中に「かっとる」の例はなく、「こうとる」で  
あった。

・おつきそいにいっしょにいとったんじゃって、  
(1031 おはなはんの成り立ち=中村)

・その水車小屋の橋の下でたぬきがおったんじゃ  
というとってな、(2083 あずき洗い=新町)

・心ではありがたいと思うとらなあかんのよな。  
(1074 ろくんぞの話=大藤東)

・その買物で、こうとる物を、とりあげるん(1138  
赤池のあずきあらい=滝下)

3. 5. 原因・理由の接続助詞「きに・きん・け  
に・けん・から・ので」

徳島本線沿線グロットグラム調査(仙波・岸江・  
石田他2007)では、沿線の他の地域に比べ「きん」  
の使用が多いという結果が出ているが、「百話」の  
調査結果では、「きに・きん」が特に優勢という様  
子は見られない。また、「きー」を使うか「けー」を  
使うかに、地域差・男女差・年齢層のちがいなどは

確認できなかった。

それ以上に注目されるのは「から」の使用が「けん・きん」に比べて多く認められることであり、文章語的な「ので」が多数に上っていることである。このことは、「百話」の文体が日常的な会話をそのまま反映する性格のものではなく、話を語る大人が時に威儀を正して話したことを推定させる。

表7は、話者の地域に分けて、「きに・きん・けに・けん・から・ので」の出現数を示したものである。「百話」の一つ一つの話の言語量には相当の開きがあるので、話者数は言語量に比例するものではなく、あくまでの目安にすぎない。話者別に整理した数値を示すことは煩雑になるので表には示さない。地域の順は、おおむね東から西へ並ぶようにした。

合計の数値を見れば分かるように「ので」の出現数が圧倒的である。次に続く「から」と比較することは意味がないかもしれない。この2語は「方言」としては記述されてこなかったものであるが、旧三加茂町の言語体系に存在するという意味で、方言の一要素として記述しておく。また、「から」は徳島市内などでの会話の中に現れるのを聞く機会が多い。「百話」に見られる使用状況は、このような語が、どのような部分から方言に侵入してくるかを知る手がかりにもなるであろう。

表7を見ると、大藤東で「けん」の使用が多いように見える。これはすべて同一話者の話の中に現れるものである。同様に、原で「きに・きん」が合計で20例と突出しているが、すべて「1017 ぶつ助＝原」で使用されているのである。この話では「けん」も3例見られる。

「3003 しいがしひろい＝角」では、次に示すように、「きん・きに・けに・けん・ので」が使われている。

- ・ねえはん、ねえはん、わたしの袋にはもういっぱいになったきん、もういのうでえ。
- ・「わたしはなんぼひろても いっぱいにならん けにおまはん先にいで わたしはもうちっとないひろうてからいぬきに。
- ・わたしは もう袋にいっぱいになったけんもういのうでえ。

表7 原因・理由を表す接続助詞の出現数

地域	話者数	きに	きん	けに	けん	から	ので
大藤	3	3				1	8
大藤東	4	3	6	1	11	2	8
大藤西	4				2		1
木藤	2	9				1	6
毛田	3	1					2
江口	5						7
山路	2				3	1	1
山口	2						4
城谷	1		1				
黒長谷	7	3		2	1	2	29
西山路	2					2	3
中庄	2						2
中井	5	1			1	3	6
西光	2				3	1	
安広	1						1
高木	1						
市	6					1	5
角	3	3	6	1	10	2	5
高田往還	1				2	1	
中村・中村東	15		4	1	2	8	16
山根	18			2	4	4	15
東新町	2				5	5	3
新町	7				2		8
古川	9	1	7		3	1	
原	11	15	5		4	2	18
西中村	7		1			1	7
金川	7				1	4	2
貞広	4		2		1	2	4
滝下	4		2			1	3
西町	2			2	1		13
北村	9		1			7	8
稲持	5	1	1			4	
鍛冶屋敷	1						1
浪内	1				4		2
泉野	1						
土久保	4						3
加茂山	4		6	2	1	3	3
五名	2					1	
桑内	1						
西庄	1					2	7
平	1		4			7	
宗本	1						3
新発地	1						
森清	1		1				
合計	175	40	47	11	61	69	204

- ・向こうにちらちら明かりが見えたのでそこへ行ってひと晩とめてもらうことにしたそう。

### 3. 6. 打ち消し過去の表現

ここに示す結果は、聞き取り調査で得られたものと少し異なる。古くからの形式であり、森重幸(1982)が中分(山地部)・里分(平地部)に聞かれる形式とする「～なんだ」(22例)が現れるのはもちろんであるが、里分の形式であり、聞き取りで池田の言い方とされた「～なかった」も多く見られる(15例)。さらに、この両者を合わせたよりも多くが「～なかった」という標準語形式であった(47例)。

- ・お母さんは、うれしいて声が出せなんだ。(1015 目の悪いおばあさんの話＝大藤西)
- ・そしたら、三日間、吉野川の水が下に流れんかったって。(2038 大人＝中村)
- ・ここにハトは落ちてこなかったか。(1035 ある猟師の話＝滝下)

### 3. 7. 命令の表現

**古風な命令表現**の「～しゃれ」が大藤地区で見られた。

- ・あした行かっしゃれ (1082 火の玉が出た話＝大藤)
- ・その山は、まけ山という山じゃけん、やめとかっしゃれ。(2061 山かせぎの好きなおばあさん＝大藤東)

また**連用形命令法**も1例見つかった。聞き取り調査では、言わないと回答された形式である。

- ・どっちでも お前のすきな方をもっておいに。(3003 しいがしひろい＝角)

以下は命令形によるものであるが、命令形だけによるもの、終助詞「ヤ」や「ヨ」が伴うものが見られる。

#### 命令形だけによる

- ・きごろうはんは、「今にあの牛をくくられるぞ。」と言って、私に右手の人さし指と親指でわをつくり、それでのぞいて見いと言う。(2053 牛くくり＝北村)
- ・これに首をかけると死ぬんぞ、これおもしろいぞ、お前もやつてみ。(1110 キツネに化かされた話＝黒長谷)

#### 命令形に「ヤ」が続くもの

- ・お昼じゃこいものでんがくを食うていけや。(1110 キツネに化かされた話＝黒長谷)

#### 命令形に「ヨ」が続くもの

- ・心配するな、もう、赤ん坊は、おまえの分まで大事にしよるけん、安心して成仏せいよ。(1085 仲の良い夫婦の話＝大藤東)
- ・ばかばかしいこともいいかげんにせえよ。(2045 祖谷の源内さん＝角)
- ・二階へつくつとる甘酒でも下ろして飲むきに、しゃんと見てしりに手をすけとれよ。(1016 ぶつすけ＝木藤)
- ・山に行かにかいかんきに太一はばあやんと留守番をしよれよ。(2066 山犬さんの話＝大藤)

### 3. 8. 「ダ・ジャ・ヤ・ダロウ・ジャロウ・ダッテ・ジャッテ」

聞き取り調査の際の談話では、「ダ」は現れず、「ヤ」が僅かに出現し、「ジャ」が多かった。「百話」においては、文末だけを見た場合、「ジャ」が218例と多く、「ダ」は51例、「ヤ」は断定の助動詞として確認できる例は見られなかった。ただし、文中の場合には、少なくとも2例が確認できる。ともに「1091 お祭り＝原」に出てくる。

- ・これは、冬の話やけど、十二月の十六日か十七日だったと思う。
- ・その時に、昔やけん、「かんけり」やいうて、かくれんぼがあったんよ。

「ダロウ」は「ダロ」も含めて60例ある。談話資料の場合と異なって、話し手の推量を表す例が多い(46例)。確認・同意を求める意味の例も少なくない(15例)。

- ・ほれはたぬきのいたずらじゃ、たぬきのいたずらだらう」(1124 たぬき話＝中村) 推量
- ・じんがねはんいわく、「おらあたぬきに化かされたんだろかえー。(3038 たぬきの人だまし＝浪内) 推量
- ・おはなはんってきいたことあるだらう。(1031 おはなはんの成り立ち＝中村) 確認要求
- ・三加茂の駅のところにな、八幡神社があるだろ。(2024 八幡さんの立て石＝西光)

「ジャロウ」は「ジャロ」2例を含めて12例あ

る。

- ・浅いとこなのに深いところと思いこんでいたん  
じゃろうな。(1107 川流れの話＝加茂山) 推  
量

- ・太一はお前の方にいったじゃろうが。(2066  
山犬さんの話＝大藤) 確認要求

「ヤロウ・ヤロ」は使用例が見つからなかった。

「ダッテ」には2種類がある。一つは、断定の助動詞+引用の助詞「て」であり、「他人の話を紹介する」機能を果たすもの (a) (9例), もう一つは断定の助動詞に接続助詞「て」が続くもので「～であった」の意味になるものである (b) (3例)。

- ・(a) たいそう食いしんぼうの男がおったんだっ  
て。(3001 とろけ草＝金川)
- ・(b) 半田と三加茂のあいだのさみしい所だっ  
てな, 毛田よりだいぶん西に昔, 大きい木があっ  
たんよ。(2084 大ギセルの話＝古川)

「ジャッテ」は152例出現するが, すべて他人の話を紹介する意味 (a) の例である。

- ・ほれで加茂谷の方は, たぬきがよう人を化かし  
よったんじゃって。(1009 たぬきにばかされ  
た話＝東新町)

なお, 接続詞として「ホンダッテ」ト「ホンジャッテ」が1例ずつ使われている。

### 3. 9 特徴ある文末表現

三好郡に特徴的な文末表現として「ガイヤ」「ガイナ」がある。金沢 (1976) によると「ガイナ」は「相手の言葉を押えて打消す力のある語」であり、「打消の意つよし」と説明されている。しかし下に示す2番目の例などを見ると、「打消の意」は必ずしも含まれないと言うべきであろう。いずれにせよ強調の意を示す終助詞とすべきであろう。また「ガイヤ」もほとんど同じ意味のようである。

- ・「横田はん, 今ちょうちん行列がきたの大楠の方へ行ったんでか?」ちゅうたら, 「なんのちょうちん行列やきやへんがいな。」ちゅうたんよ。(3048 たぬきのちょうちん行列＝原)
- ・「まあ, ほんだってここから見たらようけ大勢が並んでちょうちんふりふりきたがいな。」って言うたら, 「おくさん, そりゃたぬきにばかされとんじゃわ。」って言うたんよ。(3048 た

ぬきのちょうちん行列＝原)

- ・ごつつおうなった, こりゃあ腹がおきたがいや。(1110 キツネに化かされた話＝黒長谷)
- ・「ごじゃあ, いいなはん, わしや今まで涼みよったけどな, なんや行列やきやへんかったがいや。」ちゅうんよ。(3048 たぬきのちょうちん行列＝原)

## 4. 終わりに

「手書き三加茂百話」には, 従来の方言集に見られない語彙が数々ある。たとえば「かいもく」が「かいもくきれいな若者」のように使われているとか「あずりうんこ」という語がある等である。これらについては十分な調査を尽くして別の機会に発表することとしたい。

なお, 執筆の分担を明らかにしておく。アクセントについては村田が書いた。聞き取り調査に関しては, 峪口が基本的な枠組みを作った。「手書き三加茂百話」の部分は仙波が執筆し, また全体の調整・整理も仙波が行った。

また, いちいちのお名前は記さないが, 多忙な時間を割いていろいろとお教え下さった東みよし町の方々に感謝申し上げる。

## 参考文献

- 秋永一枝, 上野和昭, 坂本清恵, 佐藤栄作, 鈴木豊編 (1998): 『日本語アクセント史総合資料研究篇』東京堂出版
- 一字村史編纂委員会編 (1972): 『一字村史』一字村
- 上野和昭編 (1997): 『日本のことばシリーズ36 徳島県のことば』明治書院
- 加藤信昭 (1968): 「境界地帯におけるアクセントの問題—吉野川流域を中心として—」日本方言研究会第6回発表原稿集
- 加藤信昭 (1982): 「阿波の方言」『徳島の研究』第6巻
- 金沢 治 (1961): 『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館
- 金沢治 (1976): 『阿波言葉の辞典』小山助学館
- 岸江信介 (2000): 「徳島県方言における理由を表す接続助詞の変容について」『20世紀フィールド言語学の軌跡』変異理論研究会
- 岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実 (2010): 「徳島県吉野川流域アクセントの動態—吉野川流域南岸グロットグラム調査報告(2)—」徳島大学大学院国語学研究室
- 岸江信介・村田真実 (2012): 「京阪式アクセントにおける2拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」『音声研究』第16巻第3号 日本音声学会
- 坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木豊編 (1998): 『「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』アクセント史資料研

- 究会
- 仙波光明・岸江信介・石田祐子編(2002):『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室
- 仙波光明(2006):「藍住町の方言」『阿波学会紀要 第52号 総合学術調査報告 藍住町』阿波学会・徳島県立図書館
- 仙波光明・岸江信介・津田智史(2007):「三好市「旧東祖谷山村」の方言」『阿波学会紀要 第53号 三好市「旧東祖谷山村」総合学術調査報告』阿波学会・徳島県立図書館
- 仙波光明・岸江信介・石田祐子・津田智史・石田愛・川島竜太・橋本夕子(2007):『徳島県吉野川流域方言の動態—吉野川流域南岸グロットグラム調査報告—』徳島大学総合科学部
- 国語学研究室
- 土居重俊(1997):「四国の方言」『四国方言考①(四国一般・徳島県・高知県)』ゆまに書房
- 三加茂町史編集委員会(1973):『三加茂町史』三加茂町
- 村田真実(2010):「吉野川流域のアクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」徳島大学大学院平成21年度修士論文
- 森重幸(1962):「分布図からみた徳島県の方言」阿波学会報告会資料
- 森重幸(1982):「徳島県の方言」『講座方言学11 中国四国地方の方言』図書刊行会

Dialect of “ex-Mikamo Cho”, Tokushima, Japan

SENBA Mitsuaki, MURATA Mami, SAKOGUCHI Yukako,

Proceedings of Awagakkai, No. 59(2013), pp.149-161